

## 第9回認知リハビリテーション研究会からの報告

加藤元一郎

東京歯科大学市川総合病院

平成11年10月9日、慶應義塾大学病院において、第9回認知リハビリテーション研究会が開催された。以下には、そこで発表された演題がプロシーディングズの形で掲載されている。

今年の研究会では、検査、回復と予後、記憶障害のリハ、視覚・視空間認知障害のリハ、行為・遂行機能障害のリハ、の5つのセッションが行われた。リハビリテーションにおいて、正確な検査と予後が重要であることは言うまでもない。今回の報告でも、多数例における広範な検査結果の分析や少数例における継時的な分析など興味深い口演が続いた。記憶、視覚・視空間認知、行為・遂行機能障害のセッションでは、遂行機能障害と健忘との関連の分析、視覚失認や特殊な視知覚障害へのリハ、離断症状や失行のリハ、認知運動療法など、新たな認知リハビリテーションへの挑戦とも言える口演が集められ、熱心なディスカッションが行われた。心ときめくような斬新な試みも見られ、今後の継続的な発展が大いに期待される。また、このプロシーディングズが次のトライアルの基礎として貢献できることを期待したい。

なお、教育セミナーでは、東京医科歯科大学顎顔面生理学の入来篤史教授の「意図的に操作した身体像をコード化する頭頂葉ニューロン」と題する講演が行われた。やや難解なタイトルとは異なり、非常にわかりやすくスマートな講演であり、体性感覚受容野と同時に視覚刺激にも応答するBimodalニューロンが身体イメージの神経基盤であること、そして、それが如何に身体イメージをコードしているかに関する実験結果が、ビデオをまじえて詳細かつ明快に語られた。本書の原稿には、上記の講演の内容以外に、サル の道具使用行為の研究から人の言語を含むシンボル操作機能の脳内機構の解明を目指す、教授らの認知神経生物学的研究の概要と戦略が示されている。ぜひ一読されたい。